

2013年度関西英語教育学会（第18回）研究大会 概要

6月8日（土）	
16:20～17:45	イブニング・セミナー
【第1室】 教室の英文法を支えるメタ文法 —meta meta-language 小野 隆啓（京都外国語大学）	
一つの言語，例えば英語の句や文は，長さ，量ともに無限の数存在する。この集合を language と呼ぶ。それら無限の句や文の集合は文法規則により生成される。生成される句や文の数は無限であるが，その無限の集合を生成する文法規則は有限である。その数は生成される句や文の数に比べれば，きわめて限定されたものである。この文法規則の有限集合を meta-language と呼ぶ。しかし，文法規則の数は有限とは言うものの，かなりの数に上る。これらの文法規則は如何様にして生成されるのか。文法規則を生成する機構を meta meta-language と呼ぶ。英語に存在する数多くの文法現象，それを司る文法規則そのものの根底にある meta meta-language からの文法規則分析を行うことで，多くの文法規則が数少ない meta meta-language から生成されることを考察する。	
【第2室】 第二言語におけるフィラー・ギャップ依存関係の処理とその研究方法 中野 陽子（関西学院大学）	
フィラー・ギャップ依存関係とはフィラーとギャップの間に形成される関係のことである。フィラーは基本語順を外れた文の構成素である。例えば，英語の基本語順の文では動詞の目的語は動詞のすぐ後ろにある。しかし Which book did you buy at the shop near the station? という文では目的語の which book は文頭にあって基本語順を外れているのでフィラーである。生成文法に基づいた仮説では，基本語順の位置でフィラーが再活性化されるとしている（痕跡再活性化仮説）。心理言語学ではフィラーの再活性化された表象をギャップ，両者の関係をフィラー・ギャップ依存関係と呼ぶ。フィラーの再活性化については英語，ドイツ語，日本語など母語に関する先行研究で検証が行われたのち，第二言語に関しても研究が進められている。 思春期を過ぎてから第二言語や外国語を学習し始めても，なかなか母語話者と匹敵する能力を身に付けるのは難しい。第二言語における文処理についても同じことが言えるようである。文処理とはある言語単位を異なる言語単位に変換するために行われるさまざまな操作のことである。このような操作を伴う処理は高速に変化し，それをとらえるためにはオンラインの研究方法が必要である。その例として行動実験では被験者ペースの読み課題や交互様相プライミング課題，生理学的実験としては視線や脳波を測定する実験方法が挙げられる。第二言語の文処理に関する研究では，母語話者とどのような違いがみられるのか，母語話者と学習者とでは反応する情報が違うのか，違う場合はなぜなのか，という観点から上記のような方法を用いて研究が進められている。 本セミナーではそれぞれの研究方法で何がわかり何が分からないのかについて検討しながら，第二言語としての英語のフィラー・ギャップ依存関係の処理に関する研究を概観する。	

2013年度関西英語教育学会（第18回）研究大会 概要

6月8日（土）	
16:20～17:45	イブニング・セミナー
【第3室】 英語授業における学びを再考する- 社会文化的アプローチから- 今井 裕之（関西大学） 吉田 達弘（兵庫教育大学）	
本セミナーは、発達最近接領域(ZPD)と媒介(mediation)をキーワードとして英語授業における学びを再考する。特に(1)指導と評価は分け隔てるべきものか、(2)外国語の学びを教師と学習者の相互作用のどこに見いださうか、について議論する。 今井は、会話のまねごとやゲームの「遊び」と批判されがちな外国語活動を、Newman and Holzman (1993)の「方法は、道具と結果を同時に生み出す活動である(tool-and-result methodology)」という主張に照らして分析し「活動」と学びについて議論する。 吉田は、ダイナミック・アセスメント (DA) について議論する。DAでは、教師が、学習者に最も適切な援助を与えながら、ZPDを構成し、発達を促すことを目指すものだが、過去の研究事例や現在取り組んでいる研究に言及し、英語授業でのDAの可能性を論じる。	